

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520335

研究課題名（和文） 文化学的転回のトポスとしての『日本の家』研究
— 西洋と日本を結ぶ建築家の言説

研究課題名（英文） The “Japanese House” as a topos in the discourse of Western architects

研究代表者

ヴァルター・ループレヒター（Walter Ruprechter）

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：50254123

研究成果の概要（和文）：本研究により、「日本の家」を中心として、日本と西洋の文化交流に関わる諸論を展開することができた。とりわけ、伝統的な日本家屋のもつ現代性をつまびらかにするとともに、どのように「日本の家」が西洋建築家のディスコースにおいてトポスとなりえたかを、中心として考察を重ねた。それらの成果は、数々の国際シンポジウムでの発表と論文集出版、さらにはウィーン工科大学をはじめとする海外での招待講演などで公表された。

研究成果の概要（英文）：With the support of the JSPS, a project on Japanese-Western cultural exchanges with the focus on the “Japanese house” could be carried out. There are two points to be considered, first the “modernity” of the traditional Japanese house and also the question, of how it could become a topos in the discourse of Western architects.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：アドルフ・ロース / ブルーノ・タウト / ベルナルド・ルドフスキー / 堀口捨己 / 文化学 / 日本；オーストリア

1. 研究開始当初の背景

文化学では、建築家の著作は文化分析に有益であるとはほとんど考えられてこなかった。多くの建築家は、自身を一介の設計士とは捉えず、文化の探究者たらしめるものである。なかには世界を広く旅行し、幅広い教

養を身につけたものも多い。このような建築家は、異文化における建築の造形を技術的・機能的に捉えるだけでなく、生活様式のありかたとして模索・研究していき、その知見を独自の表現形式（出版、展示企画、設計、コレクションなど）へと反映させていった。建

建築物そのものの国際性は自明であるが、建築家の著作とそれに関する考察も、文化交流研究の発展に大きく資するものである。

2. 研究の目的

(1) このような文化学における欠落を補うため、本研究では、建築家の著作を分析の対象とし、各著作が文化交流分野における文化分析に一石を投じるものとして読みこむことを目的とした。そのため、日本とドイツ語圏の建築家を抽出することとし、特に、両文化が互いに色濃く影響し合っていた 20 世紀前半を中軸に据えることとした。

(2) この文化交流過程の分析の中で、期待できることの一つに、建築家独自の観点による異文化アプローチがある。建築家はあくまでも実務家であり、理論家、研究者とは異なるアプローチ法があると推測できたためである。これを分析・検討するの、本研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 「日本の家」は、本研究のあらゆる観点において中核に置かれた。20 世紀初頭に特徴的なのは、伝統的日本家屋が現代建築家の模範となったことである。ドイツ語圏でもブルーノ・タウト、ヴァルター・グローピウス、ヨーゼフ・フランク、ベルナルド・ルドフスキーをはじめとする、多数の建築家が「日本の家」を研究した。彼らの著作を比較・分析することによって、伝統的日本家屋が、西洋建築家のディスクリスにおいて、どのようにトポスへと発展したのかを示すことができると考えた。

(2) 関連する資料収集のため、ウィーンの建築センター、ウィーン応用美術館・図書館、ならびにベルリン美術アカデミーのブルーノ・タウト文庫をはじめとして、多くの図書館、資料館を訪れる必要があった。資料収集には多くの研究機関・研究者の協力を仰いだが、とりわけ、タウト専門家であるマンフレート・シュパイデルと議論を重ねられたことは、本研究の大きな糧となった。

(3) 「日本の家」というトポスは、いってみれば現代性という特性に基づいて形成されている。このことはブルーノ・タウトが、日本に三年間滞在し、上野伊三郎ら日本人モダニストと論究したうえで、西洋に紹介した。この現代性と日本の伝統の連関

は、すでに堀口捨己が 1920 年代にヨーロッパを訪問した際に見出しており、帰国後に建築で具現化していた。

このような現代性と伝統性の融合形のうち、もっとも興味深い例は、堀口捨己の岡田邸（1933 年）である。この作品は、ただ建物としての意図のみを保持しているわけではなく、和洋折衷の意図をもって構成されている。堀口は、著書でも岡田邸の構想内容を明らかにしているが、その本自体も、日本語とドイツ語の両言語のテキストが付され、一連の写真は独自の配置が試みられている。この堀口捨己と写真家・渡辺義雄の共同作品は、日本における建築写真史の先駆けとなるものである。

(4) この作品分析のためには、建築家の著作や建築史家藤森照信の文献をはじめとした定評ある資料だけでなく、ケン・タダシ・オオシマの日本戦間期における現代建築についての著作『Architecture in Interwar Japan (日本戦間期の建築)』など新しい研究成果も参照・活用することができた。

4. 研究成果

(1) 各建築家の著作を比較分析することによって特に明らかにできたのは、「日本の家」というトポスが様々な考察の集成からなっている、という分析結果である。詳細に観察した結果、興味深かったのは、ドイツの建築家（ブルーノ・タウト、ヴァルター・グローピウス）が、伝統的日本家屋を来たるべき文化統一の姿と捉えた一方で、オーストリアの建築家たち（ヨーゼフ・フランク、ベルナルド・ルドフスキー）は、むしろ西洋建築との差異を明白にし、その差異の中に生活様式の代案を模索していたことである。この各建築家の考察方法の違いには、ドイツ・オーストリア両国間の文化理解の違いが、背景として見られるようである。どちらかと言えば、ドイツでは全体的、オーストリアでは相対的傾向があった。

(2) さらなる研究成果としては、各建築家の文化研究が、通常の学術的ディスクリスとは異なる形式で行われた、という観察結果を得たことを挙げたい。建築家たちは、日本と西洋の建築を比較研究する中で得られた知見を、理論的探求へと集約させるというよりも、むしろ建築様式の実験を重ねたり、旅行、コレクション、展示活動を行ったり、または実験的出版計画をたてるなど、あくまでも実務・実践に即したディスクリスにおいて、その知見を具現化させ

ていた（例：ブルーノ・タウト、堀口捨己、ベルナルド・ルドフスキーなど）。

(3) このような建築家たちの文化探究法は、文化概念にまつわる議論に意義深い提言を与えるものとして解釈できる。興味ぶかいことに、彼らのアプローチ法が、文化学における「performative turn (パフォーマンス的転回)」へと集約できるためである。例えばブルーノ・タウト、ベルナルド・ルドフスキーや堀口捨己らのように、とりわけ生活様式に対する興味が支配的な場合には、「Doing Culture (ドゥーイング・カルチャー、文化の実践)」、つまり文化のパフォーマンス的解釈を論じた書きものとして、各建築家の著作を読むことができる。

(4) また本研究では、ブルーノ・タウトやヴァルター・グロピウスら著名な建築家の作品や著作を研究しただけではなく、比較的知名度が低いと思われる建築家についても分析を実施した。そのため日本やオーストリアで、当該地では知名度の低い建築家や文化研究者を、講演で紹介する機会を得た。例えば、ウィーンでは日本の建築家堀口捨己についてウィーン工科大学で講演し、東京ではオーストリア出身の建築家ベルナルド・ルドフスキーを早稲田大学のシンポジウムで紹介し、どちらも大きな反響を得た。

(5) 本研究の成果は他にも、国際シンポジウムなどで様々な観点から報告が行われた。2009年9月に早稲田大学で開催された国際シンポジウム「Transformation - Übersetzen (変容・翻訳)」では、ブルーノ・タウトとベルナルド・ルドフスキー、そして「日本の家」を対比して示し、どのように文化的変容の過程、そして文化的翻訳が行われているのかを示した。

そこで主張された命題は、自己を解放する心づもりがあった上で、異文化に完全に身を浸し、その結果として、両方の文化から翻訳行為が生じてくる、その場合にこそ、文化的翻訳が効果をあらわすことである。このような傾向は、ブルーノ・タウトよりもベルナルド・ルドフスキーの方でより強く観察できた。ブルーノ・タウトは、西洋的見地から異文化の価値判断を行っていた。

(6) 学際的な複数の大学からなるワーキング・グループによって開催された国際シンポジウムの一つ「Simultaneität - Übersetzen (同時性一翻訳)」は、2010年12月に、立教大学にて開催された。そこで

は、堀口捨己に関する研究成果を、建築には同時性が存在するか、という問題設定をもとに発表した。

堀口捨己における、西洋の現代性と日本の伝統性の融合は、この問題に対して肯定的な回答を示した。なぜならこの両特性の統合によって、だまし絵のように二重に読みとることのできる作品が創造されているからである。

堀口の建築が示す姿形は、二重にコード化されており、西洋と東洋、古典と現代、内と外、木とセメント、オブジェとプロジェクトなどのメルクマールを同時に読み取らせるものである。

このような二重のコード化は、日本文化にこそその典型をみることができる。日本の文化では、常に異種さまざまな対象を、弁証法的に止揚することなく、織り交ぜることができた。その例としては、本地垂迹説が挙げられる。もともと信仰されていた神道の神々は、新しく伝播してきた仏教の仏と重ねあわされて、神仏習合した二重像として同時性を帯びる場合がある。

(7) さらに研究成果を挙げるとすれば、大学・研究機関の枠組みや研究分野の枠組みを大きくこえた協同体制が築かれたことである。本研究計画を通じて、早稲田大学建築学科の中谷礼仁建築史研究室のアドルフ・ロースを研究・翻訳するグループと連携をとるようになり、日本でのアドルフ・ロース著作集出版に携わることとなった。第一巻の刊行に際しては、「アドルフ・ロースとウィーン文化」という解題エッセイを執筆し、2012年4月に刊行の運びとなった。

(8) 以上のように、本研究では、空間芸術としての建築物とその複雑な生成過程を文化学的手法により考察しうること、その例として20世紀前半の建築家とその作品を主に取り上げることで、西洋と日本の両文化が相互に作用しあう過程をつまびらかにしようと試みた。

この文化交流の一断面としての建築作品分析は、文化学の新しい局面を提示できたのみならず、家の概念を文化的事象と捉え、建築家個々人の文化横断的思考の軌跡を明らかにした点で画期的である。特に「家」の概念に関して、建築学、文化学、文献学だけにとどまらず、建築人類学、建築民俗学、各文化論、哲学など学際的観点を大きく広げた結果、異文化接触の軌跡をよりダイナミックに観察できたことは、本研究が他の研究と一線を画す点である。この家の概念に関しては特に、スイス人日本学者ノルト・エルディンガーや、マルティ

ン・ハイデガーの『建てる・住まう・考える』など、文化間の空間構想の違いを意識的に取り上げた著作が該当し、これらを重点的に検討することによって、本研究がさらに大きく発展する可能性も確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. Rupprechter, Walter: Der mimetische Welterzeuger. Kommentar zu einer Lesung von Bodo Hell. 人文学報、465号、2012、11-17頁 (査読無)
2. Rupprechter, Walter: Sutemi Horiguchis Synthesen von westlicher Moderne und japanischer Tradition. 人文学報、450号、2011、21-42頁 (査読無)
3. Rupprechter, Walter: Abendländische und Wiener Kultur - Adolf Loos als Kulturkritiker. 人文学報、435号、2010、67-80頁 (査読無)

[学会発表] (計5件)

1. Rupprechter, Walter: „Sutemi Horiguchi. Ein japanischer Architekt als kultureller Vermittler zwischen Ost und West.“ (2011年3月28日、於：ウィーン工科大学)
2. Rupprechter, Walter: „Kommentar zu einer Lesung von Bodo Hell“ (ボード・ヘル・シンポジウムBodo-Hell-Symposium、2011年3月16日、於：ウィーン、アルテ・シュミーデ文学館 Literaturhaus Alte Schmiede)
3. Rupprechter, Walter: „Der Hasen-Enten-Garten des Sutemi Horiguchi“ (シンポジウム Simultaneität - Übersetzen (同時性・翻訳) 2010年12月6日、於：立教大学)
4. Rupprechter, Walter: „Griechisches Japan: Heimatsuche der Japan-Exilanten Bruno Taut und Kurt Singer.“ (ゲーテ・インスティトゥート及び学習院大学主催シンポジウムExil in Ostasien (東アジアへの亡命研究会) 2010年9月18日、於：学習院大学)

5. Rupprechter, Walter: „Gibt es

Simultaneität in der Architektur?“ (シンポジウム Übersetzung -- Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen. (同時性・翻訳・変容) 2009年11月27日、於：葉山セミナーハウス)

[図書] (計4件)

1. Hamazaki, Keiko u. Christine Ivanovic (Hrsg.): Simultaneität - Übersetzen. [Reihe: Stauffenburg Colloquium Bd. 70] 2012, 300Seiten. 担当論文: Rupprechter, Walter: Simultaneität in der Architektur? Über das Haus Okada des japanischen Architekten Sutemi Horiguchi. S. 59-72.
2. アドルフ・ロース、ヴァルター・ループレヒター他: 『虚空へ向けて—アドルフ・ロース著作集1』アセテート、2012、314頁。担当解題: アドルフ・ロースとウィーン文化、272-285頁
3. Thomas Pekar (Hrsg.): Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945) Berlin 2011. 285 Seiten. 担当論文: Rupprechter, Walter: Griechisches Japan: Heimatsuche der Japan-Exilanten Bruno Taut und Kurt Singer. S. 218-228.
4. Yamamoto, H. u. C. Ivanovic. (Hrsg.): Übersetzung -- Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen. Würzburg 2010. 280 Seiten. 担当論文: Rupprechter, Walter: Transformationen eines Topos: Das „japanische Haus“ bei Bruno Taut, Walter Gropius, Bernard Rudofsky und Josef Frank. S. 162-172.

[その他]

1. Rupprechter, Walter: Bruno Taut: Nippon - mit europäischen Augen gesehen. Hrsg., mit einem Nachwort und mit Erläuterungen versehen von Manfred Speidel. Berlin (Gebr. Mann Verlag) 2009, Bruno Taut: Architekturlehre. In: ARCH+ Zeitschrift für Architektur und Städtebau, 194, Oktober 2009. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Band 9, Heft 1, 2010, S. 185-189. (書評)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ヴァルター・ループレヒター

(Walter Ruprecht)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：50254123